

平成元年、三十七歳の私は税理士開業五年目で、社長の悩みや心配の大半が、「税務以外にある」という、税理士としての自己矛盾の中になりました。そこで「帝王学」を学ぶことが最も重要ではないかと、井原隆一氏の「社長の帝王学」を読み出したのです。

実績も縁故もない新米税理士の私のお客様になって下さる社長は、小規模で、資金繰りが厳しく、良い社員が来てくれないという「人」の問題を、誰もが共通して抱えておられたのです。

税金の相談ということは、企業が安定してからの問題で、即今、解決しなければならぬのは、一つは、目の前の「資金繰り」と二つ目は「人」の問題であり、その前提として「社長その人の器」を創る事が先決問題だと気付いたのでした。

それから三十三年、古稀を迎え、改めて井原隆一氏の「社長の帝王学」を読み返しました。「一行一行が、事例の一つ一つが、正に我が意を得たり、という深い感銘を受けながらストンと腑に落ちるのです。当時、七十八歳の井原隆一氏の年齢に近づいたことや、今までの経験も、その要因の一つだと思えます。

これを一人喜んでいては勿体ないと、早速、若手社長に声掛けをして、十名で勉強会を始めることにしました。

春秋戦国・斉・越・秦・楚・漢・呉・魏・蜀・隋・唐・宋の中国の歴代の人物達が生き活きと躍動しながら、現在の我々に「こんな時は、こう判断して、こう対処するのだ」と教えてくれるのです。

一人の経験には限度があります。全部経験出来るほど人生は長くありません。やはり、先達に学ぶことです。

「諫めを聞く者は、もとより須らく虚懐なるべし。諫めを進むる者も亦須らく虚懐なるべし」「大器は人を求め、小器は物を求む」、「一将功成りて万骨枯る」等々、成功した経営者や歴史の教訓から学ぶことがある、と井原隆一氏は、語っておられます。

徳のない者は経営者としての資格がない。知識や技術、資格やノウハウも必要です。しかし、トップに立つ人は、やはり人間的魅力を身に付けること、部下がついて来てくれる器であることが必要です。

社長、帝王学を身に付け、混沌の時代を正々堂々と経営して参りましょう。

今月のポイント

社長だけの学問、

それが帝王学です。

